R1 妙高高原中学校第１回学校運営協議会(ＣＳ)

会 議 録

□日　時　８月 29 日(木)　19：000～20：15

□場　所　妙高高原中学校　応接室

□参加者　竹内 会長　吉越 副会長　堀川 委員　ロス コーディネーター

涌井 事務局長　永髙 事務局員　重野 校長　渡邉 教頭　　欠席 山川 委員

【進行：事務局長　記録：事務局員】

１　開会のあいさつ（竹内会長）

中学校区ＣＳの取組の方向性を受けて、中学校ＣＳについて協議をしていく。コーディネーターを中心に、地域、家庭、学校がどのように子どものために具体的に活動していくか委員で協議をお願いしたい。

２　協議（議長：竹内会長）

１）高原中学校として CS に求めること・ねらい

別紙：「中学校としてコミュニティ・スクールに求めること」校長提案　⇒　承認

〈意見等〉

・家庭の教育力が問われる。まずは、家庭で子どもをしっかり見ていかなければならないと感じる。（竹内会長）

・学力の向上は当然だが、人間性やコミュニケーション能力が求められる時代。学校、地域、家庭が同じ方向性で子どもを育成していかなければならない。また、郷土を愛する子どもを育てていきたい。（吉越副会長）

・具体的に地域がどのように協力できるか。地域の運動会等に、企画段階から中学生が入るなどの取組をすると、コミュニケーション力を養えると感じる。また、地域の産業や事業所等と連携して、多くの大人を引き出すことも必要だと感じる。（堀川委員）

２）次年度からの具体的な取組について

・子どもが地域のイベントに参加しやすいように、各地区の「イベントカレンダー」作成に着手した。広範囲にわたるため、集約が難しいので、区長会で、各地区区長に協力を依頼したい。また、中学校の行事等にも、保護者だけでなく地域の人から入ってもらう仕掛けをすることも、今後、検討していきたい。（ロス コーディネーター）

・家族で積極的に地域行事等に参加してほしい。しかし、家族で参加できない家庭に対しては、地域で応援して子どもだけでも地域に引き出す支援も必要だと感じる。（ロス コーディネーター）

・中学生には発達段階からして、何か役割を持たせることが大切。地域の行事に中学生が入るときは、計画段階から入るなどの配慮が必要だと思う。（吉越副会長）

・今ある高原地区の資源を有効活用して、現行の地域行事等をふくらませていくという視点も重要だと感じる。（永髙事務局員）

・赤倉地区では、お盆の祭り等で、観光客相手に中学生が活躍している。（涌井事務局長）

・地域の行事に中学生が参画しやすいように、学校としても全教職員共通理解のもと、部活動等の活動も配慮していくよう進めている。また、中学校の行事等にも地域の方が参画するような取組を推進していきたい。（校長）

・中学校の提案は、本来の高原地区の姿。代や人が変わっても継続可能なシンプルな活動を行っていくべき。（吉越副会長）

３）今年度にやるべきこと

・中学校区ＣＳの取組が、各小学校ＣＳ委員に理解されていない面がある。小学校コーディネーターとコミュニケーションをとっていきたい。（ロス コーディネーター）

・各地区「イベントカレンダー」作成。（ロス コーディネーター）

・次年度の取組に対する準備を学校でも進めていく。（校長）

４）その他

・小学校、中学学校、それぞれのＣＳが連携した取組を行っている。年度当初計画した中学校区ＣＳの回数を、４回から２回に減らす。（校長）　⇒　承認

３　その他

・次回予定：秋から冬休み前を目処に調整する。（教頭）

・中学校体育祭の案内（教頭）

・前期学校評価の説明（教頭）

４　閉会のあいさつ（吉越　副会長）

中学校は、今までＣＳに係る活動をしていなかった訳ではない。現行の活動を“かたち”にしていきたい。 方向性が決まったので、地域、保護者、学校の協働を推進していく。

【別紙】

中学校としてコミュニティ・スクール（CS）に求めたいこと

妙高高原中学校長　重野　準司

１　CS で目指したい子どもの姿

CS の取組を通して、地域でどのような子どもを育てていくか？

↓

「社会性、特に、人間関係づくり能力（コミュニケーション能力）を身に付けた生徒」

２　設定の理由

①　生徒の実態から

１学期を振り返ってみると、生徒間には様々なトラブルがあった。中でも多かったのが、ちょっとした人間関係のもつれ、不適切な言動が原因のトラブルである。集団に人間関係のトラブルはつきものだが、問題は、そうしたトラブルを自力解決できない生徒が多いことである。長期的な視点での計画的な人間関係づくり能力（コミュニケーション能力）の育成が求められている。

②　時代の要請から

これからの時代は変化の激しい先の見えない時代だと言われる。そんな時代を主体的に生き抜いて行くために必要な資質・能力は、早く正確に「**正解**」を当てる力ではなく、正解がない問題に対して仲間と協働して試行錯誤しながら「**納得解**」を作りだす力だと言われている。この納得解を作り出す力を構成するのが以下の５つの要素である。

１）コミュニケーション力（異なる考えをもつ他者と交流しながら、自分を成長させる力）
２）ロジカルシンキング力（常識や前例を疑いながら、柔らかく複眼思考する力）
３）シミュレーション力（頭の中でモデルを描き、試行錯誤しながら類推する力）
４）ロールプレイ力（他者の立場になり、その考えや思いを想像する力）
５）プレゼンテーション力（相手とアイデアを共有するために表現する力）

先にも触れたように、納得解は他者との協働によって導き出されることを考慮すると、コミュニケーション力やロールプレイ力、プレゼンテーション力は欠かせない。

３　目指す生徒の姿に迫るために（私案）

学校として１学期を振り返ってまず思うことは、子ども達による地域貢献の機会が少ないことである。５月の艸原祭（吹奏楽部）と７月の名香山苑ボランティア活動（環境委員会）のみであり、しかも、一部の生徒に限られている。実際、１学期の学校評価の生徒アンケートの結果、肯定的評価の数値が最も低かった（67.9%）のは、「地域の行事や取組、ボランティア活動に関心をもち参加した」という項目であった。これから先を見通しても、９月 29 日（日）の「妙高高原スポーツフェスティバル」や冬のブラインドスキーへの協力があるものの、子ども達は地域の次代を担う存在であることを考えると、郷土の将来を背負って立とうという当事者意識の醸成のためにも、もっと多くの子ども達が年間を通じて地域の行事への参加を通じてその活性化に貢献する機会が必要ではないだろうか。学校は極めて狭く閉じられた社会である。地域社会に出て、地域の行事に携わることを通じて、多様な他者との関わりが生まれ、関わりの中で必然的にコミュニケーションが求められ、人間関係づくり能力（コミュニケーション能力）の伸張が期待できる。（特に運営側になることが有効と考えられる）

また、地域のみならず、家庭や学校でも社会性育成に特化した活動を推進する必要がある。例えば、あいさつ運動（働きかける立場）や９年間を見通した計画的なソーシャルスキルトレーニング（SST）の実施等、子どもの社会性（コミュニケーション能力や人間関係作り能力）の育成に向けた取組を、地域、家庭、学校の３者が、それぞれの立場でできることを互いに連携しながら推進していくことには大きな意味がある。

４　次年度からの具体的な取組例（私案）

＜地域＞

＜家庭＞

＜学校＞

・各担任及び学年部は、望ましい学級集団づくりのための手立てを工夫し、着実に実行に移すことで、各学級の支持的風土を醸成する。
・各教科、領域等の授業において、外部人材を学校に招聘したり、学校から地域に出て活動したりしながら、計画的に外部人材と関わる機会を設ける。
・教員は、話合い活動を計画的に授業に位置づける。
・教員は、授業のみならず、学校の教育活動全体を通じて、話合い活動を推進する。